

## 学問の道

鈴木正彦

手の本をすて、た、かふ身にしみて 恋しかるらし。  
学問の道 迢空

「私は今、彼らの、暫らく学と文学とを忘れて、専ら戦場の人として、最深い生を営むことを希つてゐる。私どもには、彼等の時々、私に示した若い拳止・表情が、ともすれば、閃く如く思ひ出される。思へば短い値遇・邂逅であつた。其がまた今は却て深い思ひをうごかす。」（鳥船）新集第三追ひ書き）——慈愛溢れた先生の温いお心の底に秘められた悲哀が、既に、今日あることを予言するかの如く、私達若い世代の学徒の運命を氣遣つてゐられた。だが、さうした悲しみことの許されない程厳しい時代感に締附けられてゐた当時の学徒達が、（民族のいくさびと）としての自覚に、どの様に対決してゐたかは、身近か

な「鳥船」の友人達の作品（新集第三所収）によつても窺ひ得る。今はもよ 悔ゆることなし。兵となる心安さを 深く思へり 戦ひに我は召されぬ。学びたるのうとの整理終へて 安けし 晴れ々と 秋深むなり。兵とならむ心のほども 落ち着きて来ぬ 召さるゝ日を 心とゝのへ待ちて居り。冬ちかければ 日は冴えむとす 征かむ日の近づく日ごろ たらちねに語ることは 慶まれけり 耐へがたき思ひとなりて 対ひ居り。このよき友も 兵と征くなり うつくしく死なむこゝろの かしこさに、ひたぶるに思ふ。 国の行すゑ

同胞の血もてあがなひし南の島をぞ 我等征きて 守らむ  
ひたぶるに 国を思へり。わが如き懶き性も 嗔びをの、く  
そして、若い世代の同人の殆一人々々の作品から、かうした学  
徒出陣の歌をお撰びになつた先生のお気持は、どんなであつた  
らうか。慶應義塾における「壯行歌」、国学院における「学問  
の道」の御作をはじめ、「民族のいくさび」とに贈る「鳥船」新  
集第三所収）などといふ先生の一文を読み返してみる時、その底  
に湛へられた深い先生の憂愁を今更に思はないではゐられない。  
而も、当時の私達は、人生における二十才といふ若い理會と納  
得とに心を委ねて、表面、何の未練もないかのやうに潔く、学  
問の世界から、先生の膝許から、真直ぐに飛立っていったこと  
だった。

昭和十八年十一月二十四日、母校の学徒壯行會に臨んだあと、  
東京を離れる直前、闇に包まれた出石のお宅にいとまごひに  
伺つた折の印象は、忘れることが出来ない。（教場の牕を開き、  
研究室の扉をさして）靜かに籠られた先生の、哀愁に満ちた眼  
差と、しみじみとしたお論しの言葉とは、清冽な泉となつて、  
今もなほ々滾々と私の心に湧き上つて来るのを覚える。その折  
饒別にと書いて下さつたのが、はじめに掲げたお歌である。こ  
のお歌は、二十四日の壯行會の席上で発表された長歌「学問の  
道」の反歌三首中の一つで、はじめ第四句は（戀しきものは）  
とあつたのを、その晩、「鈴木の出陣を祝つて、一ヶ所手を入  
れたよ。（恋しきもの）では、他人ごとみたいだからね。これ

なら少しは近親感が出てゐるだらう。」とおっしゃつて、下さつ  
たものである。それにしても、かうした内容のお歌をいたゞく  
とは、征く實際まで、よく／＼学問に対する未練話を先生に申  
上げたからだつたのだらう。卒業論文を仕上げないことの心残  
りを繰返した私に、先生は憐憫をお感じになつたに違ひない。

復員後、家に贈られてゐた「鳥船」新集第三のこのお歌が、  
私のいたゞいた形に改まつてゐるのを、その間に戦ひといふ激  
しい時の流れをおいて見た時は、涙の溢れる思ひだつた。事實、  
その長歌自身も、（学に輝く）が（知慧に輝く）と改められ、  
結びの（国学の学徒は強し、いでさらば、今は訣れむ）が、（国  
学の学徒は強し。魂に思ひ深めて、いでさらば、今は訣れむ）  
とある他、章節・語句の句切れをはじめ、句読点に至るまで、  
行届いた先生の推敲のあとが見られることは、我々大いに学ば  
なければならぬ。そして、このことは、この歌だけでなく、  
例へば、

青雲ゆ 雉鳴き出づる倭べを遠ざかり来て、我哭かむとす

（昭和十五年「遠やまびこ」所収）

雉子鳴きて 青雲出づる大倭べを思ひ悲しむ。青ぐもの色

（昭和十八年「日本評論」一五号所載）

青雲ゆ雉子鳴き出づる 大倭べは、思ひ悲しも。青ぐもの色

（昭和十九年「鳥船」新集第三所収）

青雲ゆ 雉子鳴き出づる大倭べを 思ひ悲しむ。青ぐもの色

（昭和二十年「山の端」所収）

をはじめ、先生の作品の一切について言ひ得ることもあつた。ともあれ、あの夜、健かにと祝つて下さつたビールのほろにがひ味も、思へば、遠い想ひ出となつてしまつたことだ。

× × × × ×

学徒であることが、昨日までの第一生活であつた私達にとつて、何もかも異つた環境が、常に生命の危機に曝されてゐた生活がどんなであつたかは、想ひ出しても堪へられない程、若い魂にとつての無慙な苦惱であつた。二度目の櫻が散り、二度目の梨の花が咲く頃には、同じ運命に身を委ねた学徒兵の戦友が、一人二人と私の周囲から、丁度、葉の広ごりに身を寄せた露のやうに、儂く美しく消えていつた。それが明日の自分の運命とは知りながらも、その鮮かな清々しいまでに澄みきつた美しさに、泣くことも忘れて茫然と過してゐたのだが。然し、さうした純真な若い学徒の生命が、蒼白い火花となつて戰場に明滅する悲哀の極致に立つ時、何の感傷も忘れてゐた筈の心の奥処から、勃然として湧出してくる先生のお歌の断章が、先生のお声となつて、私の魂に響いて来るのだつた。

汝が千人　いくさに起たば、

学問は　こゝに廢れむ。

汝らの千人の一人

ひとりだに生きてしあらば、

国学は　やがて興らむ。

万が一にも望み得べくもない〈千人の一人〉——。それを思ふ

と、学問と訣別した身も、諦観の世界に無理やりに秘めてゐた心も、絶望の境地に僥倖を求めて、狂ほしいまでに渦巻く。学問への郷愁——。〈千人の一人〉にかけられた先生の悲願が、戦塵に染みきれない身に、学徒としての切実な夢を誘ふ。現実を否定する心と、肯定する心が錯綜するなかに、白文万葉集を握りしめて、ぐらまんの機銃掃射を浴びてゐたとき、眼の前に向日葵の花が黄金の光をうけて、くるくると眩いてゐた日の遠い想ひ出——。

× × × × ×

八月十五日——。終戦。復員。

敗れた国の憂愁と、〈千人の一人〉となり得た歓喜とを抱いて、学問の世界へ、先生の慈愛のみ心のうちへ、不可能を可能として戻つて來得た身の幸を、しみじみと味つたことだつた。而も、〈短い値遇〉とおっしゃつた先生の膝下にあつて、助手といふ恵まれた環境のもとに、三期に涉り先生のすぐれた風格と、晩年の高い学篤とにゆき触れて、熟しきらない私の魂を高め得たことは、正に充実した長い値遇に与り得たものと、その幸福を感謝しないではゐられない。

恙なく生命を保ち得て戻つて來た身の幸を先生は、

たゝかひのくるしきときに、まなびたる学問をおもふ。

学のこほしさ

と言祝いで下さつた。このお歌が、常識的な壽歌ではなく、そこに学者としての先生の深い詠歎がにじみ出てゐることが、そ

の折苦しいまでに私の胸をうったのだが、先生はそれを学問の道に志してその出発点に立った私への饒となさったのであらう。思へば、先生のお諭しは、すべて学問の道といふことがその根柢にあつた。そして、その点では、容赦のないきびしい先生でもあつた。そのきびしさからこそ、あゝした前人未踏の学問の世界が生れたことを尊まないではゐられない。助手生活を止める直前、先生が三矢先生から拜領のわわけた衣類をお示しになつて、学問に志す者の道が如何に峻しいかを諄諄とお説きになつたお言葉が、研究室といふ温室を出た現在の私にとつての大きな励ましとなつてゐるのは有難いことであると同時に、もう再び先生のお叱りを耳にする日のないのは、言ひようのないさびしさだ。先生亡き今、悔恨の情にうちひしがれて、風樹の嘆きを思ふ程程しい私を、先生は常世国にあつて、憐み給うていらつしやることだらう。

今年の四月、六年間の助手生活を終つて、先生の膝下から巣立つた私にとつて先生の死は、正に青天の霹靂であつた。あれ程御迷惑をおかけしつゝけたのと思ふと、御病気の重いことさへ知らず、日々に追はれてゐた私の不甲斐なさを嘆かずにはをられない。先生の百日祭も済み、能登一宮の葬り処に御魂の鎮まり給ふた今もなほ、在りし日の先生の面影が去来して、私の心は定まらない。先生の想ひ出を語る程しづかな心境には到底なれさうもない現在、筆の乱れは許していただきたい。

(すずき・まさひこ/和洋女子大学名誉教授)

〔編集人付記〕右の文章は、今井福治郎編集・発行の文芸誌『雪炎』第26号(折口信夫先生追悼号、一九五四・一)に掲載された平安文学研究者・鈴木正彦氏の追悼文である(折口信夫は、一九五三年九月三日没)。二〇一九年、編集人は、高橋美織氏、さらに川崎キヌ子氏を介して、学徒出陣し海軍士官の経験のある鈴木氏に、戦争下の『萬葉集』についての執筆を依頼した。鈴木氏は本『戦争と萬葉集』誌の趣旨に強く共感し、ご快諾くださった。しかし、ご高齢でご体調も崩されていたところに、二〇二〇年初以降の新型コロナウイルス感染症の拡大に氣力を奪われ、執筆を断念された。その後、高橋氏が『雪炎』掲載の「学問の道」を発見した。太平洋戦争下における学徒の心情を伝える貴重な証言として、依頼していた原稿に代えてこの文章を再録させていただくこととした。再録に当たつて、体裁の明らかなる誤りは訂正した。漢字表記については、新字体と大きく異なるものについては原文に従うこととした。

〔追記〕鈴木正彦氏は二〇二〇年十一月二十七日に御逝去されました。心より御冥福をお祈り申し上げます。